

特集
インフラの未来

MESSAGE

夢をみる大切さ

子供の頃、母が中学生の頃にとっていた学習雑誌を見るのが好きだった。古めかしいイラスト、印刷の質のせいでおどろおどろしい色合いになっている写真などを、たまに眺める至福の時間。その中に「わたしたちの21世紀」という特集があり、それがまたグッとくる内容だった。

そう、透明ドームの中の都市や宙に浮く車、壁掛けテレビや電送新聞、吹き付け洋服の世界だ。他、原子力冷蔵庫や大規模地熱発電など、夢と希望だけを盛り込んだ世界がアナクロな表現で描かれており、ページをめくるたびに奇妙にワクワクしたものである。

そして後年、21世紀を迎えた頃に自分はライターとなり、そのワクワク感を記事にした。文字通り「昔の雑誌の『未来予想図』を鑑賞する」というものである。母の雑誌だけでなく、終戦後しばらくたってからの雑誌とか、もっと時代を下ったあとの少年誌とかを古本屋で集めて、ただただ俯瞰してみるというものだ。「音速滑走体」「冬眠銀行」などの未来的な言葉と共に「オートメーション」「ビフテキ」

などのアナクロ風味の言葉が使われているのを見ては、しびれていた。

そこからさらに後年、どうにもそれらの未来図が頭の隅にこびりついていて私は、描かれた未来の生活の様子をドールハウスで表現してみたりもした。それは鑑賞や俯瞰などという本来の目的からは少しずれて、あの昔の未来図独特のバタ臭さ、どぎつい色表現や愉快的な機器のデザインを再現するのが主旨ではあったが、それなりに未来図というものに取り組めたと思う。

ところで、先に申し上げた記事「昔の雑誌の『未来予想図』を鑑賞する」で、特に印象に残ったのは昭和26年発行の少年雑誌の記事だ。そこに描かれていた未来図にハッとした。いたって普通なのだ。現代人から見れば、描かれている「鉄筋コンクリートの建物、全戸に降り注ぐ日光、舗装道路、スポーツグラウンド、通学バス・・・」それらは全部、あって当たり前になっているものばかりだ。戦後6年しか経っていない当時の人々が思い描いた未来の夢

は、後年ほとんど現実となったわけだ。

時代を下り、昭和30年代初頭の未来図には「透明ドーム、吹き付け服」の突飛な世界が現れる。これらの実現化は現代でもまだまだ先の話だ。しかし「壁掛けテレビ」は今やあっても驚かないものになっているし、「電送新聞」はスマホなど形を変えて実現していると言ってよい。

未来図を描いた当時の人たちにも、これら突飛な道具の実現の可能性はわからなかっただろう。技術的な予測はできたかもしれないが、そこは少年向けの雑誌、大きな夢を思い切って増幅して誌面に投影してみたはずだ。

そんな中から少しづつ本当に組上に載せられ、熱意ある人たちによって具現化してきたのだろう。あの頃、ブラウン管テレビ全盛の時代にはまったくの夢物語に近かった「壁掛けテレビ」が今こうして電気店で普通に並べられているのも、元はといえば無邪気に絵に描いて表現してくれた人たちのおかげなのかもしれない。そして今や「吹き付け服」までも研究され、テストされているという。言ってみ

る（描いてみる）もんだなあ。

「合格！」や「やせる！」などの目標を紙に書いて壁に貼っておくと達成率が上がるとか、目標の体型などの写真を貼っておくとそれに近づきやすい、とかの話に通じるものがあると思う。逆に彼らが、こんなこと夢想してちゃダメだ、人になんと言われるかなどと萎縮していたら、たくさんものが形にならないまま終わっていたかもしれない。

自分はよく人から「皆が考えてはいたけど作ったりしないもの」を実際作ってしまうのがすごい、と言われることが多い。工作の腕がいい、というより「アホなものを本当に作っちゃったかこの人は！」という意味で驚かれる。それはそれで誇りに思う。やりたいことはどンドンやってみたり、表現してみたりするほうが、周囲も巻き込んでいって面白いことになることが多い気がする。もし夢があるのなら、その次の段階はそれを「何らかの形で外に出してみる」ことではないかと思っている。



乙幡啓子
OTSUHATA Keiko

プロフィール

1970年群馬生まれ・東京在住。ニフティ「デイリーポータルZ」、雑誌「季刊レボ」に脱力系工作記事を連載中。著書「妄想工作」「乙幡脳大博覧会」「笑う、消しゴムはんこ。」絶賛発売中。また妄想工作所名義で「ほっケース」「スペース・バッグ」などの雑貨製作・企画も行う。<http://mousou-kousaku.com/>

ドールハウス（乙幡啓子作）